

ミニ・ニュースレター

2019年春号

東北ヘルプ事務局から、平和の挨拶を申し上げます。

目次

- 8年目の御挨拶 東北ヘルプ代表 吉田隆
- 第一部 特集 9回目の「3.11」
 - 超教派での追悼会 1-1 ~ 1-3 頁
 - 福島の記事 1-4 ~ 1-7 頁
 - 日本基督教団東北教区の記念礼拝 1-8 ~ 1-10 頁
「東北教区 3.11 私たちの祈り 2019」
- 第二部 特集 原子力災害被災者の今と未来を見つめて
 - 避難した人々の近況 2-1 ~ 2-2 頁
 - フクシマとミナマタ 2-3 ~ 2-5 頁
- 事務局報告
- 会計報告

第8回 **愛と希望の**
大震災を覚える追悼記念会
コンサート

2019年3月11日
14:00-19:00
会場：仙台市立中央公民館
入場無料

3・11 記念集会

3月5日(月)午後1時30分
会場：聖賢川シオンの丘
〒980-0822 仙台市青葉区南郷 2-1-1
TEL: 022-231-2328
TEL: 022-231-2329

主催：福島県キリスト教連合会 (FCC)

日本キリスト教団 東北教区主催
3・11 記念礼拝
ご案内

2019年3月11日(月)午後2時30分より仙台市青葉区にて

会場 聖山教会 仙台市青葉区南郷2-1-1 TEL: 022-231-2328	会場 追込教会 仙台市青葉区追込1-1-1 TEL: 022-231-2329
会場 仙台北教会 仙台市青葉区北1-1-1 TEL: 022-231-2330	会場 山形六町教会 山形県山形市六町1-1-1 TEL: 023-622-1111

お問い合わせ：022-231-2328 東北教区事務局 TEL: 022-232-0930

8年目の御挨拶

あれから8年が過ぎようとしています。

毎年この季節には「復活祭（イースター）の御挨拶」と共にニュースを皆様にお届けしてきましたが、クリスマスと違って祭日が移動するイースターは、今年は4月の下旬と遅いのです。そのかわり、このたびのニュースがお手元に届く頃は、イエス・キリストの苦難と死を思い巡らす「受難節」が始まる時期（今年は3月6日）と重なることでしょう。

8年前もそうでした。2011年3月9日（水）から、その年の受難節（レント）は始まり、その二日後に震災が起こりました。その日から、私たちは想像を絶する「苦難と死」を目の当たりにしながら歩み続けたのでした。

今回のニュースの中に、「水俣（ミナマタ）」と「福島（フクシマ）」についての考察が入れられています。ぜひ熟読していただきたい記事です。が、それとは別に、水俣を思った時に、ちょうど一年前に亡くなった石牟礼道子さんの『苦海浄土』という作品のタイトルが頭に浮かびました。『苦海』とは、もちろん直接は水俣の海を指しているのでしょうか。しかし、東北の被災地を思った時、私には真黒な海によって愛する家族やすべてを失った方々の苦しみを表わす言葉としても響いてきたのです。

そして、ちょうど石牟礼さんがその『苦海』を生きる人々の深い悲しみとその奥底にある人間の尊厳を描いたように、私たちもまたこの8年の年月を耐え忍んで生きて来られた方々の中に同じものを見てきたように思います。

イエスがお語りになった言葉に、こんな言葉があります。

「柔和な人々は、幸いである／その人たちは地を受け継ぐ。」（マタイ5:5）

この場合の「柔和な」とは、単に心の穏やかさということだけでなく、むしろ無力にさせられている状態を指しているのだそうです。力を奪われて弱くさせられた人々が「地を受け継ぐ」と言われるのは、その人々がそれでもその地を愛し、その地で生き続けているからです。そして、その苦しみの地をイエスが共に歩んでくださるからです。

今号のニュースレターの一つ一つの記事の中には、それぞれが歩んできた8年の足跡と、9年目に進む“今”が記されています。一枚一枚の頁を括りながら、御一緒に8年の歳月を思い巡らしていただきたいと思います。そのようにして“受難”の黙想を重ねた先に、今年も復活の季節が訪れることでしょう。



仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(東北ヘルプ)

代表

吉田 隆

第一部

特集 9回目の「3.11」

2011年3月11日に「あの出来事」があってから、
「8年」の月日が流れようとしています。
被災地は、「9回目」の「あの日」を迎えます。

流れ去るはずの時を、切断してしまったような、
そんな「3.11」を思い出す機会。
今年は、8回目の記念の時を持つようとしています。

「超教派」のネットワークにおいても、
そして日本基督教団のつながりの中でも、
そして、福島県内の諸教会においても、
「あの日」を想起し記念する催事が持たれます。

今回のニュースレターは、その第一部として、
三つの団体の「3.11」記念催事について、
ご報告します。

第一は、東北ヘルプ理事で宮城三陸3・11東日本大震災追悼会準備委員会代表の中澤先生（基督聖協団仙台宣教センター牧師）による寄稿です。

第二は、東北ヘルプ理事で福島県キリスト教連絡会世話人の木田先生（郡山キリスト福音教会牧師）のインタビューです。

第三は、東北ヘルプ監事で日本基督教団東北教区総会議長の小西先生（日本基督教団仙台北教会牧師）のインタビューです。

それぞれの寄稿・インタビューの後に、催事のご案内をご紹介します。
また、日本基督教団東北教区の礼拝で用います祈祷文も、掲載させていただくことができました。東北教区のご高配に心から感謝いたします。

この特集が皆様のご高覧にあずかり、あるいは遠隔にあっても共に「あの日」を覚える祈りのつながりが生まれる機縁となれば——と、そう願いながら、三つの記事をお送りいたします。

(2019年2月25日 川上直哉 記)

東日本大震災の被災地において、神様は超教派のネットワークを豊かにお用いくださいました。教派教団の伝統の違いは、協力の中で、豊かな力となりました。

東北ヘルプ理事でもある中澤竜生牧師（基督聖協団仙台宣教センター）は、このネットワークの要の一人となって、特に「3.11」を憶える集会の開催に尽力されてきました。

今年の「3.11」を憶える超教派の集会の紹介と、そして、これまでの概要、更にこれからの課題について、中澤先生が寄稿してくださいました。以下の通りです。ご高覧に与り、祈りに覚えて頂ければ幸いです。

2019年2月24日 川上直哉 記

超教派での追悼会

宮城三陸3・11東日本大震災追悼会準備委員会代表

中澤竜生

東日本大震災より9年目を迎えます。そして東北沿岸地方で今年をもって8回目のキリスト者による追悼会が開催されます。

開催される場所は、3月9日(土)東松島市コミュニティーセンターと、3月11日(月)女川町まちなか交流館の二か所です。今までの追悼会を知って下さる方の支持は大きく、行政との信頼も深めております。



地元紙にも掲載いただきました。

私たちは「未曾有の大震災よりあの日の事を忘れない」と語り合い、そして「出来るだけの事をしていこう」と寄り添うことを決意し、今日までに至りました。「主イエスの愛が唯一の希望である」との確信に立って、自らがクリスチャンであることを自覚的に担い、その「クリスチャンとしての確信」を言葉と行動を示しつつ、震災直後から支援を続けています。

追悼会は、2012年から毎年、超教派の協力の中で、行われてきました。下記は今まで開催した場所です。多様なキリスト者の協働の跡が、ここに反映していると思います。

2012年 南三陸町志津川被災地（野外）

2013年 クリスマンセンター「南三陸 愛・信望館」

2014年 南三陸町「ホテル観洋」

2015年 石巻市 総合福祉会館「みなと荘」

2016年 「気仙沼第一聖書バプテスト教会」
石巻市 集会場「釜会館」

2017年 「気仙沼第一聖書バプテスト教会」

2018年 南三陸町「ホテル観洋」
「気仙沼第一聖書バプテスト教会」
石巻市「Be-1 教会」
登米市「イエス福音教団 宮城教会」



準備会合の様子。右端が中澤竜生牧師

「こんにちは、一人でも多くの方に
愛と希望を届けたい」
——この思いから、東松島市、
女川町、石巻市、登米市、南三
陸町、気仙沼市において活動さ
れるクリスマンが結束しまし
ました。2014年には「宮城三
陸 3,11 東日本大震災追悼記念
会準備委員会」を発足させ、追
悼会の開催体制を整えました。

私たち「宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念準備委員会」は、震災年から10年は続けようと決めています。継続には欠かすことができないことがあると思います。たとえば、「時間」「人」「経済」「協力」「被災者心情」というキーワードで示される事柄です。

実行委員各位は、常に努力を惜しまず、最善の工夫をもって協力しあい、開催に向けた取り組みを進めています。どうしても不足するのは「人」と「経済」です。全国・全世界の主にある協力が、なお、必要です。是非とも覚えて頂き、応援下さればと願います。

第8回

愛と希望の 大震災を覚える追悼記念会 コンサート

この日、「愛と希望」を奏でる音楽とともに
追悼のひと時を。
悲しみを乗り越え、繋がり合い、
励まし支え合いながら歩めるように。

《出演》
久米小百合
向日かおり

Sayuri Kume

Kaori Mukahi

2019

3.9 土

開場 13:30
14:00~15:30

会場

東松島市
コミュニティセンター
宮城県東松島市矢本字大溜 1-1

3.11 月

- ◆第一部◆
追悼記念会
14:00~15:00
- ◆第二部◆
追悼記念コンサート
16:00~17:00

会場

女川町まちなか交流館
宮城県牡鹿郡女川町女川浜字大原 1-36

救世軍ジャパNSTAFFバンドアンサンブル 3.11 月出演

主催：宮城三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会実行委員会

共催：東松島・石巻・女川ミニストリーネットワーク

後援：東松島市、東松島市教育委員会、東松島市芸術文化振興会

三陸河北新報社(石巻かほく)、石巻日日新聞社、ラジオ石巻 FM76.4MHz

宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会ホームページ

<https://miyagi3riku3011.jimdo.com/>

入場
無料

問い合わせ：080-3304-1351 (中橋)



福島記念会

木田恵嗣先生インタビュー

——今年の「3・11記念集会」の概要を教えてください。



2019年3月5日の午後1時半から、「須賀川シオンの丘」で、記念集会を行います。船田肖二牧師（白河栄光教会）が代表を務めている福島県キリスト教連絡会（FCC）が主催します。私も、世話人として、その企画に関わりました。

昨年、FCCの全体会が11月にありました。そこで、毎年開催してきている3・11記念集会をどうするかという話が出て、すぐ、「2019年3月にも記念会を開催すること」が決まりました。毎年行っているこの会を、継続していくこと。そのことに、参加者全員が意味を感じておられたように思います。

その会議の後に、シオンの丘神学教育講座が開かれ、日本伝道会議を振り返り、ローザンヌ運動の学び会を行いました。「支援と宣教が分裂してはいけない。両方とも、神様の愛の現れである。二つを一つとして支援活動を整理してみよう」という、とても有意義な学び会となりました。

3・11記念集会の講師等、詳細については、全体会のすぐ後に、神学教育講座が開かれたため、時間切れとなり、主なメンバーの多くが集まる1月の会合に持ち越すことになりました。その会合は「放送伝道を支える会」の委員会でした。もう半世紀以上続いている、超教派の運動体です。もともと「世の光」のラジオ放送を行う団体でした。今は「ライフ・ライン」というテレビ放送を行っています。その委員会が1月に行われるので、その時に、記念会の詳細を詰める話し合いをすることになりました。

1月の話し合いで、福島聖書教会の岸田牧師に講師をお願いしたいと、提案させていただきました。その推薦に込めた思いはこうです。——今までは、福島で震災を経験した者が、県外の人々に発信してきました。他方、岸田先生は、2011年に大阪で震災を体験した方で、福島に移り住んでくださった方です。先生が福島市にお住まいになって、今年でちょうど5年目を迎えます。そういう先生が体験した福島を、今度は私たちが聞かせていただく。そのことに、新しい意味があると思ったのです。

話し合いは充実して進み、岸田先生に講師を依頼することが決まりました。岸田先生も、快く応じて下さいました。感謝なことでした。タイトルは「放射能汚染の現実に向き合って——福島に来て五年目を迎えて」となりました。

——これまでの記念会を振り返り、転機などは、あったのでしょうか。

これまで8回、FCC主催の記念集会在、毎年行われて来ました。私は、そのすべてに関わり出席しましたが、それを振り返ってみますと・・・やっぱり、2015年にFCCが新体制をとった時が、一つの転機だったと思います。それ以来、FCCの雰囲気が変わりました。それまでは、福島県内のそれぞれの地区の働きを連絡するのがFCCでした。それを変更して、いわば「目的主導型」に変えたのでした。結果、「保養プロジェクト」「仮設支援」「放射能対策室」、「放送伝道」などの諸活動を繋げる役割を、FCCが担っています。それは、一定以上の成果を挙げつつあると思います。

——先生個人の中で、「転機」は、あったのでしょうか。

私は、福島市で被災しました。その翌年、同じ群れの教会がある郡山市に転任をしました。郡山市の教会で礼拝をする、という事は、福島市の教会で礼拝をすることとは、ずいぶん、意味合いが違っていたことに、すぐ、気づかされました。

福島市では、そこで「あの時」を共に体験した人々と、そのつらい経験を共有した。その思いを土台として、共に礼拝の時を過ごし、教会生活を送りました。それとは少し違う雰囲気が、郡山市の教会生活にある。そのことに、戸惑ったことを覚えています。

——福島市と郡山市でも、ずいぶん被災経験が違うのですね。

はい。ひとりひとり、一つ一つ、やはり、違う経験をしているのだと、実感したのです。「被災地」は一つではない。「被災」は多様である。そう思いました。そして、その「ひとつひとつ」が出会い、つながり、そして共に生きていく。それが教会なのだ、と、実感しています。

去年10月に、スタディーツアーをしました。埼玉県の飯能の教会の皆様が私たちを訪ねてくださったことが機縁となり、時を同じく会津の教会支援に来られた相模原牧師会の方々とユーオーディアのメンバーが加わり、22人くらいの

ツアーになりました。そこに、郡山市の教会員も加わって、ホットスポットファインダー（高性能放射能測定器）を持ち込み、原子力被災地を歩き廻りました。多様な人々が、祈りを共にしながら、現場に触れる。それは、新しい理解を生み出す良い出来事となりました。「福島に住む者こそ、それを学ぶべきだった」という声も上がりました。

そうやって、多種多様でひとつひとつが深刻で重大な「被災体験」が、神様のみ手のうちに繋ぎ合わされていく。そこに教会のすばらしさがあるように思いました。

——将来に向けて、課題と希望を語るとすれば、どんなことがあるでしょうか。

今、重荷に感じていることは、保養支援事業であった「ふくしま HOPE」を終わらせなければならないことです。実際、外面的には、もう支援の必要はないように思われる。それが現実だと思います。でも、それは全体の一部なのです。必要を痛切に感じている方々がたくさんおられる。でも、それをどう表現しているかわからない。そして、「問題はない」ように見えてしまうことになる。その矛盾、そのつらさを、今、感じています。

深刻な原子力被災地である福島の必要が、なくなったわけではないのです。むしろそれは深刻化している。ですから、これまでの形をやめて、新しい形を模索しなければなりません。まだその「新しい形」が見えずにいます。苦しいところです。でも、今まで関わってくださった方はみな、これからも何かの形で継続していこうと、志をしっかりと保持して、祈り続けてくださっています。

また、新しい希望が芽吹いていることも感じています。去年3月の震災7年を振り返る記念の集会を企画する中で、FCCのつながりが広がり始めたように思われているのです。FCCは緩やかなネットワークです。隣接する様々な超教派の活動団体があります。そうした団体との関係は、これまでも良好に保ってきましたが、昨年あたりから、更に交わりを深めていこうという流れが、徐々に、生まれ始めています。

震災の時には一つになったものが、いつしかだんだん、分かれて行っている気がしてきた、そんな8年でもありました。でも、何かのきっかけを得て一つになれる、そんな時を求めて祈って来ました。神様が、確かにその祈りを聞いてくださる。そんな雰囲気を感じることができています。ゆっくりと、でも祈り続けながら、主にある一致を求め続けたいと思います。

(聞き手 川上直哉)

3・11 記念集会



講師

岸田誠一郎師のフロンティアール

1956年大阪府生まれ

大阪市立大学理学部大学院を卒業後、富士フロンティア研究所に勤務。その後、献身して牧師となり、千葉県、大阪府の教会を経て、現在は福島聖書教会牧師。福島県キリスト教連絡会放射能対策室長。

- 記念講演：岸田誠一郎師
「放射能汚染の現実に向き合って
—福島に来て5年目を迎えて—」
- 情報交換
- 福島のために祈ろう

3月5日(火)午後1時30分より

会場 須賀川シオンの丘

〒962-0802 須賀川市堤字四戸内 202

☎0248-73-2325

問合せ：080-3031-5412 (船田肖二)

主催：福島県キリスト教連絡会 (FCC)

日本基督教団東北教区の記念礼拝

小西望先生インタビュー

——今年、教区で行われる記念礼拝は4か所で別れての開催となりますね。

はい。これまでの経緯を振り返ってみましょう。

2012年3月20日が最初の礼拝でした。仙台青葉荘教会を会場として、灰の礼拝とシンポジウムを行いました。それ以来、記念礼拝を、教区として毎年行ってきました。ただ、去年は「3月11日」が日曜日でしたので、一か所にみんなが集まるのは難しいだろうと判断して、8箇所での開催となりました。すると（考えてみれば当然なのですが）出席者数が倍増したのです。そのことを踏まえて、今年も4か所での開催となったのです。

——2012年から今年で8回目となるのですね。この間、礼拝に変化がありましたでしょうか。あるいは、「転機」と呼べるような時が、あったでしょうか。

8か所に分かれて行われた去年、私は仙台五橋教会での礼拝に出席しました。毎年と比べて、礼拝自体に大きな変化はなかったように思います。つまり、毎年、この礼拝において「2011年の3月に繋がる、立ち返る」ということが起こり続けているのだ、と思うのです。いわば「カイロス（流れ去る時間を切断するように立ち現れる神様の出来事の時）」が、あの日・あの時にあったのでしょうか。今年も、3月11日の礼拝は「カイロスに立ち返る時」となるのだと思います。



その上で「転機があるか」と考えてみます。ひとつ、思うところがあります。つまり、「ひとり一人の状況」が、本当に一つずつ、まったく違うということです。この8年の間の歩みに、大きな転機を迎えた人もいます。そうでない人もいます。その8年は、みんな、まったく違う。だから、全体としての「転機」を取り出して語ることは、難しいように思うのです。皆全く違う被災後の日々を過ごしている。でも、そんな一人一人が集まって、礼拝の中で、一緒に座る。そこに、とても大切な意味があるように思うのです。

——小西先生個人の中では、変化はあったでしょうか。

私個人を振り返って、「3・11」を挟んで、何が変わっただろうか・・・振り返ってみますと、「祝祷」が変わりました。

震災発生から召天が判明する6月まで、教会員の中に、行方不明であった方がおられました。そのことに心を痛める私たちがいました。その中で礼拝が行われる。その最後に祝祷をする。その最後に「(祝福が)今思い浮かべる一人一人と共にあるように」との言葉が加わりました。それは自然にそうになった、という感じでした。そして、それは今でもそのまま継続しています。

私たちは神様から祝されて、礼拝から押し出されて行く。そこで、私たちはとりなしの祈りへも導かれていく、と震災の中で気づかされたのです。祝祷は執り成した、と気付かされた。そういうことだと思います。

——9年目の被災地と向き合おうとする今、どんなことを思われますか。

改めて、震災は「カイロス」だったと思います。「カイロス」には意味があるはずですが、でも、私たち全員の胸に落ちるような「共通の意味」が見つかりません。あの出来事の意味は、「一人一人」に、ある。それはみんな違う。でも、その「それぞれ」が、共に集う。神様の前で静まり、あるいはその意味を語り合う。そういう時を持つ。そうして、私たちの「それぞれ」を、私たちは分かち合うことができる。そのことに大きな可能性があると思うのです。

そう思うと、昨年・今年のように、分散して礼拝をすることに、大きな意味があるかもしれません。一つひとつの会場で、説教者が「自分のこと」を語り、それに応えて参加者が「それぞれ」語り合う。そして、そのすべての礼拝の中で、昨年も今年も、共通の祈りが用いられることになっています。

(後掲します「**東北教区 3.11わたしたちの祈り2019**」を、どうぞご高覧下さい。) 昨年は、その祈りを関東教区でも共有していただきました。今年の祈禱文も作成されました。これを用いて、様々なところにおられる多くの方々と、「それぞれ」の心を合わせて、祈りをささげることができればと願っています。

そうして始まる「9年目」の被災地で、やはり大きな課題として、東京電力福島第一原発事故の被災地を思います。

たとえば、長く休止状態となっていた小高伝道所は、昨年秋に協議会を行い、多くの人々と祈りを合わせながら、「これから」を見つめてきました。そして今、代務者を中心に、近隣の教師も協力して、原則として第4日曜日の午後3時から、礼拝が行われています。次は3月24日(日)に行われます。全国におられる主にある姉妹方・兄弟方に、是非、覚えてお祈りいただき、あるいは一緒に礼拝を守る幸いを得られればと願っています。

津波被災地についても、課題は残されています。

「東北教区被災者支援センター・エマオ」は、この3月でその働きを終わります。でも、地域の被災後の営みは続くのです。ここまで神様が支援の働きを導いてくださった。その働きを、地域の教会がどう引き継ぐのか。そう考える時、素晴らしい動きが始まっていることに励まされる思いがします。たとえば石巻山城町教会は、教会員の皆様が貴いお力を寄せ合ってください、これまで培った被災者各位とのつながりを、教会を会場として、継承発展させてくださっています。そうした一つ一つの働きを、これからも皆様と一緒に支え祈りに覚えていきたいと思っています。

(聞き手 川上直哉)

日本キリスト教団 東北教区主催

3・11 記念礼拝 ご案内

2019年3月11日(月)は、東日本大震災から8年となります。

会場は地域分散型で以下4ヶ所において、いずれも午後2時30分から記念礼拝を執り行います。
最寄りの地域の教会へぜひ足をお運びください。

2019年3月11日(月)午後2時30分より 下記4会場にて

福島

会場 郡山教会

(郡山市清水台2丁目6-4)

説教者 高橋真人 教師 (会津坂下教会牧師)

JR 郡山駅西口より
徒歩約10分
福島交通清水台バス
停より徒歩約3分



山形

会場 酒田教会

(酒田市日吉町1丁目1-7)

説教者 長尾厚志 教師
(仙台ホサナ教会牧師)

JR 羽越本線
酒田駅西口より
徒歩約10分



宮城

会場 仙台北教会

(仙台市青葉区東勝山2丁目27-18)

説教者 中井利洋 教師 (仙台東教会牧師)

- ① 仙台駅前20番乗り場
「虹の丘団地(東勝山経由)」
→ 東勝山二丁目南下車すぐ
- ② 仙台駅前3番乗り場
「宮城学院前」行き
- ③ 仙台駅前2番乗り場
「宮城大学」行き
- ④ 地下鉄旭ヶ丘駅
「宮城学院前」行き
→ 東勝山三丁目南下車徒歩5分



山形

会場 山形六日町教会

(山形市旅籠町3丁目3-34)

説教者 中村正俊 教師 (上山教会伝道師)

JR 北山形駅東口より
徒歩20分、
車で7分程度
バス 山形駅より
市役所経由路線で
市役所前下車徒歩3分



お問合せ 日本キリスト教団 東北教区事務所 TEL 022-222-0998

「東北教区 3.11わたしたちの祈り 2019」

主なる神さま

あなたのみ名をほめたたえます。

わたしたちは8年前に起こった「あの日」の出来事を覚え、祈りを共にしています。

8年前の「あの日」、わたしたちはそれまでの暮らしが一変してしまうような、大きな出来事を経験しました。それ以来、わたしたちは「あの日」のことを一瞬たりとも忘れることがありません。

震災の出来事はあまりにも大きく、わたしたちの口ではすべてを語ることはできません。

しかし神さま、あなたは祈る言葉をわたしたちにお与えくださいました。震災の現実から立ち上がる力を見いだせず、どのように生きれば良いのか分からなくなってしまっていることがあります。そうしたわたしたちをどうか憐れみ、助け起こしてください。あなたの助けのみが希望です。み言葉の希望をわたしたちにお示してください。今なお、震災で苦しみの中に置かれた方々、悲しみの中に置かれた方々の涙をあなたの慈しみと慰めをもってどうぞ拭ってください。そして、どうかわたしたちの祈りを聞き入れてくださいますようお願いいたします。

地震と津波で被災された方々を覚えて祈ります。

住む場所を失った人がいます。愛する人を失った人がいます。孤独を強いられている人がいます。どうぞその人たちを顧み、慰め、希望を与えてください。復旧・復興の業に携わる人々の業をお守りください。東京電力福島第一原子力発電所の事故のために困難な生活の中にある方々、とりわけ避難生活を強いられている方々に平安をお与えください。

わたしたちはあなたから託されたこの世界を、「あの事故」によって汚してしまいました。

どうかわたしたち人間の傲慢をお赦してください。そしてそのようなわたしたちを今一度、憐れんでください。そして、この苦しみや悲しみを次の世代に繰り返すことのないように導いてください。未来を担う子どもたちをお守りください。国や行政を司る人たちに神さまの知恵が与えられますように。

わたしたちは、あなたがいついかなる時も一緒にいてくださることを信じます。

この震災の出来事の現実の中にありながら、あなたのみ心を見いだしていくことができますように導いてください。生かされている喜びを感謝することができますように。神さまの平和を実現する者として、わたしたちを用いてください。

この祈りを、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン。

第二部

特集 原子力災害被災者の今と未来を見つめて

9年目の原子力被災地を前にして、今私は、学生時代に『立ち尽くす思想』という本を読んだことを思い出しています。

原子力災害被災地で、土壌を測ると、驚くほど高い数値が出ます。私が住む石巻市（原発事故現場から100キロ北）でも、震災前の500倍以上の放射能が、土壌や苔などから検出されています。

でも、福島県内ですら、だんだんと「日常」が戻ってきています。おそらく事故はまだ収束していないのですが、問題は見えなくなっていく。その流れに、抗うこともできない私たちがいます。

その中で、病を負った人々は、一つ一つに不条理と矛盾を感じます。子どもを育てる人々は、小さな命を守ることの難しさに直面しています。そして、がんその他で大切な人を亡くして行く人々は、言葉を失ってただ茫然とするばかりです。

私たちは、ただ「立ち尽くす」ばかりです。でも、「立ち尽くす」ことは、できるかもしれない。もし、希望を胸に抱き続けるならば。

今、一つの聖書の言葉が、こだまして聞こえる気がします。

「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか」（ヘブル書 10:23 以下）。

私たちは、いつも現場から聴いて考えてきました。今回の特集も、そうしたいと思います。原発被災地と津波被災地が交差する現場で、ずっと人々と共にこの8年間を過ごしてきた後藤一子先生に、今の状況を語っていただきました。そして、同じような現場で何が起きたのか。それを、水俣＝ミナマタの現場に聴いてみました。以下に、その報告をいたします。ご高覧にあずかれば幸いです。

（2019年2月25日 川上直哉 記）

避難した人々の近況

——後藤一子先生インタビュー——

日本同盟基督教団の隠退牧師である後藤一子先生は、最後の赴任地であった福島県相馬市（福島県の太平洋側・原発事故現場から50キロほど北側）で「2011年3月11日」とその後の日々を過ごされました。そして牧師を引退した今も、後藤先生は、市内の被災者を訪ね、ボランティアを繋ぎ、支援の働きを続けておられます。2019年2月1日、相馬市内で後藤先生にインタビューをさせていただきました。是非、お読み下さい。

(2019年2月25日 川上直哉 記)

——仙台市と郡山市といわき市にある放射能計測所はなお続きますが、支援の現場に「8年間」の時間が経ち、変化があちこちに見られます。最近の先生のご様子を教えてください。



左が後藤先生。
右は、復興公営住宅のお世話係をしておられるAさん。

震災以来、ずっと、相馬市に避難してこられた方々に関わらせて頂いてきました。いろいろな変化があり、そして遂に、相馬市の仮設住宅が、今年の春には終わる予定です。南隣の南相馬市でも、同様です。西隣の飯館村の仮設住宅も、3月で終わります。実際、仮設住宅を訪ねても、去年あたりから、人の気配が無くなっていました。原発近くの富岡町から浪江町の間は、まだ電車が走っていませんが、2020年には全線開通の予定となっています。

——川内村と南相馬市小高区から始まった「帰還」の流れは、どんどん進んでいますね。加えて、津波被災者の「帰還」も進んでいる。でも、「帰る場所」が、果たしてあるのかどうか。大規模な工事の結果、風景も一変してしまった。除染をしても、放射能の不安は消えない。それでも、仮設住宅からの退去は、進んでいるのですね。

はい。ですから、浪江町や飯館村などから避難してこられた方が、相馬市などにも、たくさん住み着かれました。特に高齢者ですと、「帰還」すれば病院に通えなくなるものですから、もう避難先に定住する、という方が多くおられるように思います。

もちろん、地域差があります。南相馬市小高区の場合、スーパーができましたし、人が戻っている感じが強いように思います。反対に、小高区の南にある浪江町は、まだ立ち入り禁止の場所も多く、駅の周りも閑散としています。小中学校も開校しましたが、本当に少ない人数しか子どもがいないと報道されています。飯館村には道の駅ができて、そこには人も集まってきているそうです。

——今の課題は何でしょう。

8年たってきて、あのときの不安は薄らいでいると思います。けれど孤立している。特に帰還者の孤立が心配されています。

相馬市あるいは南相馬市原町区など、強制避難地域にならなかった場所に自宅や復興住宅を得て（つまり帰還せずに）、そこでサークルを作っている人たちを、定期的にお訪ねしています。そこで感じますことは、まったく誰とも交流を持っていない人も多い、という現実です。そうした方々は、集まりがあっても、呼びかけをしても、おいでにならないのです。仮設住宅で自治会長だった人などが、とても心配をしています。この問題は、帰還した方々においても、あるいはより深刻に、あるのかもしれませんが。

津波被災地から避難され、そして帰還された皆さんとも、よく出会っています。それでも、体の不自由な人も多く見受けられます。90歳代になった人も多いのです。体が思うように動けず、出て来られなくなっています。

「ゆったりした時間がない」という声を聞きます。ですから、「リラックスできる」という時間、「お茶会」の必要を感じています。そうした時間をもって、自由にお話をしたい。そういう必要が、今、強くあるようです。ですから、一ヶ月に一度程度の頻度で「お茶会」を続けています。そうして今も30人弱の方と恒常的に関わっています。そこには、飯館村・相馬市・小高区そして浪江町の方もおられます。「お茶会」がなくても、とにかく機会を見つけて、立ち寄るようにしています。とても、喜んでくださるのです。「おしゃべり」で、人は生き生きするのだな、と感じています。

——これからの課題は何でしょうか。

復興公営住宅に入られた方が願っているのは、住宅の「払下げ」です。今は、庭に花を植えることも「許可なしにはできない」状態なのです。お孫さんたちが訪ねてきても、寝泊まりさせる場所もない、という声を聞きます。復興公営住宅は、どこもだいたい3DKくらいの間取りで、「二人暮らしには良い」作りになっているのです。だんだん落ち着いてきたので、そろそろ増改築したい、と思う人も多いのですが、それはまず、許可されない。それで、なんとか無理ない範囲での「払下げ」を、多くの方が願っています。

市もその声に応えようとしています。相馬市では、当初、「建築費1500万円程度」の各住宅を「公営住宅販売価格500万円」で払い下げる、と検討されていたところ、先日それが「430万円」になった！と、皆が喜んでいました。「買えれば安心」だと、少し明るいニュースでした。

私の支援活動についていえば、神様の守りの中、必要がいつも満たされています。お菓子やガソリン代が必要なのですが、献金を今でも寄せていただけるのです。感謝に堪えません。

(了)

フクシマとミナマタ

東北ヘルプ事務局長 川上直哉

歴史を学ぶ時、私たちはそこに未来を拓く手がかりを得ます。ちょうど、走り幅跳びをする際に助走が必要なように、遠くの未来へ飛び込むために過去を長く見てみる必要がある時があると思います。

分断の中で矮小化され、複雑化して忘却される——それが、今の原発事故現場だと思います。その困難の中で、今日も教会は、そしてたくさんの母親たちが、踏みとどまっています。今、過去を振り返ってみる必要があるように思うのです。

以下に、過去を、とりわけ「ミナマタ」を振り返り、そこから希望と教訓を得る作業をしてみたいと思います。具体的には、いくつかの論文をご紹介します。一つひとつ、苦難の現場から生まれた、貴い言葉の束です。ダウンロードができるように工夫しましたから、お手に取っていただければ幸いです。
(2019年2月26日 記)

1. 「フクシマ」と「ミナマタ」のつながり

” Conference on Faith, Science and the Future ”の意義：フクシマ事故の現場から
2014年の日本キリスト教史学会で発表した私の論文です。
『被ばく地フクシマに立って』(ヨベル社)に収録しました。

<http://xfs.jp/mw0Ah>



東京電力福島第一原発の事故の被災地は、福島県だけではありません。事故によって広く東日本が汚染され、あるいは地球環境が大きく傷つけられて（あるいは傷つけられ続けて）います。その意味での被災現場全域を言い表す言葉として「フクシマ」を用いた方が良い時があります。同様に、水俣病は熊本県の水俣市で発生しましたが、しかしそれは水俣市だけの問題ではありませんでした。1979年3月、米国でスリーマイル島原発事故が起こります。その年の7月、世界教会協議会（WCC）は公式の国際会議を米国で開催します。テーマは「信仰・科学・未来」でした。その会議で、水俣の現場で踏みとどまってきた科学者・宇井純さんが講演をしています。原発事故の現場を意識しながら、彼は「ミナマタは水俣市に留まるものではない」と、会場に訴えていました。そして、その訴えはこだまし、2014年のWCC声明文「核から解放された世界へ」につながって行きます。

1. 今も繰り返される「ミナマタ」周辺の出来事

森下直紀「水俣病における「不知火海総合学術調査団」の位置」

今日まで水俣病をめぐって展開した世間と国の様子を簡潔に整理されている、素晴らしい論文です。

<http://xfs.jp/p0YAP>



水俣病がこの世界に発生してから（その時期は確定不能なほど昔です）病気の確認が医療者によってなされ、騒ぎが大きくなってから政府が動き、「解決」を目指して滑稽なほどの学者の狂騒が興り、そして石牟礼道子さんなどの努力もむなしく世間から忘れられていく。その絶望のなかから石牟礼さんが社会学者に助力を要請して「総合学術調査団」が生まれていく・・・という流れが、この論文に示されています。それは、「立ち尽くす」ばかりの現場にいる者への励ましとなると思うのです。

『宇井純セレクション1』（特にその中の358頁「御用学者とのたたかい」）

水俣の現場に立ち尽くした宇井純さんは、一個の科学者として、当時の様子を抉り出しています。

<http://xfs.jp/lkfUE>



それは、本当に、今と「そっくり」であること。そのことに、驚かされます。

『宇井純セレクション2』（特にその中の183頁まで）

宇井さん自身、水俣の時に起こった事柄が、実は足尾銅山鉱毒事件の時に起こったことであったことを知り、愕然としたようです。しかしそこから、宇井さんは、希望と手がかりを見つけます。

<http://xfs.jp/KAJQv>



19世紀後半の足尾の事件の中で、人々は結束して踏みとどまり、そして一つずつ尊厳を確保した。その貴い遺産を継承しなければならない。そのことを宇井さんは強調します。それはまさに、私たちへのメッセージでもあると思うのです。

3. 苦難の現場が（いのちを削って）遺したもの

『水俣の啓示』 上 宗像巖「水俣の内的世界の構造と変容」（特にその143頁以下）

上記「総合学術調査団」の一人が宗像巖でした。彼はキリスト教神学や神道に造詣が深い人でもありました。

<http://xfs.jp/b9hJu>



この論文は、水俣の精神性が現場の言葉のなかから見出され、それが更に、「無原罪の受苦」という衝撃によって展開を示している、ということをお話しています。

谷口智子「宗教学から見た「水俣」」と

佐藤広美「災禍における教育」は、
宗像が現場で見出した「水俣の精神性」という
可能性を、分かりやすく語っている文章です。

<http://xfs.jp/VmAKr>

<http://xfs.jp/BEDg5>



福島においても、福島の現場にある精神性が「無辜の犠牲（あるいは「十字架の反響）」において新しい展開を示すかもしれない。その時、理不尽にのしかかる苦しみに、一つの意味が見出され、大きな慰めになるかもしれない。そんなことを考えさせられる文章です。

成元哲氏が発表した二つの論文は、
水俣が新しい社会の可能性を示すことを
力強く示唆しています。この二つの論文は、
水俣における抵抗運動の本質が「承認」を目指しているものであった、ということを示します。

<http://xfs.jp/zZINz>

<http://xfs.jp/iRVUF>



それはつまり、「福島での闘い」があるとして、その本質はおそらく「人間の尊厳」を目指すところにあるのだろう、ということ（つまり、金銭ではないはずだ）ということを予感させます。特に「初期水俣病運動における「直接性個別性」の思想」は、水俣の闘争が結果として人間の肌触りのような「代替不可能なもの」を確保するものとなっていた、ということに注目し「すべてが取り換え可能となっている社会（その結果、いのちを見失っている社会）」を切り替える手がかりが、その中に見出せるのではないかと、現場にいる私たちを励ますものとなっています。

その点については、宇都宮大学で（つまり足尾銅山を念頭に置いて）
福島と水俣を検討した報告と話し合いにおいても確認されているものです。

<http://xfs.jp/BmfHz>



4. 教会の位置

キリスト教神学者である岡田仁さんは、
「苦海に座す神」と「民衆の霊性」という
二つの論文を、水俣の現場から書いています。

<http://xfs.jp/NNshn>

<http://xfs.jp/KFTEq>



著者の岡田さんは、神学校の現場実習で水俣に行き、演劇を行う人との出会いの中で霊的な考察を展開しています（特に「民衆の霊性」）。

また、「民衆の霊性」の終わりには、厳しい教会批判が展開しています。それは逆に、今（なお、まだ！）被ばく者とともに教会があり得ている福島の現実が、水俣の時より「すこし」進歩している、と、少しの励ましを得ることができるものです。

そして「民衆の霊性」よりも少し前に書かれた「苦界に座す神」という論文は、現場で七転八倒しながら聖書を読み直している、生々しい息遣いが聞こえる論文になっています。（了）

事務局報告

2018年も、祝福の裡に過ごすことができました。
皆様のご支援を心から感謝いたします。

東北ヘルプは理事会組織をもって運営されています。理事会は毎月行われます。献金額の減少が（ある意味“順当に”）減額し始めていることを自覚し、毎月の収入・支出の在り方を事務局長報告によって確認し、調整し、知恵を出し、そして心を合わせて祈っています。

1月に行われた理事会において、事務局長は以下のような数字を報告しました。

2016年12月～2017年1月の献金 262件 3,633,963円（2016年度収入は1578万円）

2017年12月～2018年1月の献金 233件 3,619,806円（2017年度収入は1197万円）

↑の二か月の支出=2,050,762円

2017年4月1日から2018年1月末までの収入=9,915,074円

2017年4月1日から2018年1月末までの支出=9,478,441円

2018年12月～2019年1月の献金 218件 2,711,449円（2018年度収入は778万円+α）

↑の二か月の支出=1,859,312円

2018年2～3月の収入=約200万円

2018年4月1日から2019年1月末までの収入=7,788,090円

2018年4月1日から2019年1月末までの支出=7,462,457円

以上の数字は、以下のことを物語っています。

- (1) 2018年のクリスマス献金額は、大幅に減少した。
- (2) 2018年のクリスマス献金件数は、微減にとどまった。
- (3) 収入の減少に合わせて、活動を工夫し、支出を抑えることができた。

この中の(1)(2)は、「相次ぐ災害もあり、一つ一つの献金額は減少したけれど、献金をお寄せくださる方々の数は減っていない」ということを示しています。事務局として、襟を正し背筋を伸ばす思いが致します。また、上記の(3)については、少しの驚きと共に、感謝を深く覚えました。事務局として、特別に大きな困難を迎えることなく支出の削減ができた。あるいは、必要な分は、日々確かに与えられた——これこそ、皆様の祈りの果実です。心から感謝して、ご報告申し上げます。

(2019年2月26日 川上直哉 記)

収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2018年 4月 1日

至 2019年 1月31日

(単位：円)

会費収入	(正会員・協賛会員 合計21件)	55,000
献金収入	(教会・団体・個人 累計509件)	7,733,086
その他収入	(預金利息等)	4
収入計		7,788,090
給料手当	(職員給料手当・退職金を含む)	2,250,000
法定福利費	(社会保険・労働保険)	177,776
新聞図書費	(書籍代)	53,278
通信運搬費	(電話・郵便・運賃)	390,784
賃借料	(コピ-機・レンタカー)	-
支払手数料	(銀行手数料)	64,375
外注費	(社労士等)	577,800
消耗品費	(10万円未満の消耗品)	-
事務用品費	(10万円未満の文具等)	167,253
広告宣伝費	(ニューズレター等)	546,291
租税公課	(償却資産税・印紙等)	600
旅費交通費	(高速代・JR券代等)	985,206
燃料費	(ガソリン代)	198,996
地代家賃	(家賃・駐車料)	-
会議費	(会食代・会場代等)	168,814
雑費	(その他経費)	-
支援費	(他団体への支援)	1,881,284
支出計		7,462,457
当期損益金額		325,633
前期繰越損益		1,238,239
次期繰越損益		1,563,872

2018年度(2018年4月~2019年3月)は、
1200万円の予算を組んでいます。

2019年1月末時点での進捗率は、以下の通りです。

1. 日数=12か月分の10か月=83%の進捗時点で、
2. 収入=1200万円に対して7,788,090円=65%
3. 支出=1200万円に対して7,462,457円=62%



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北郡山キリスト福音教会牧師・ふくしまHOPE 代表）

監事 小西望（日本基督教団仙台北教会主任担任教師・日本基督教団東北教区総会議長）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※肩書等は、すべて2018年12月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com